

## 「遺産」というまなざしを再考する——福山市鞆の浦を事例に

森久 聡 (京都女子大学)

### ■問題関心と研究報告の目的

本報告は、福山市鞆の浦の埋め立て・架橋計画問題を事例に、伝統的な町並み景観や歴史的な建造物がどのような意味合いで地域住民の社会生活に息づいているのかを検討する。そして無自覚に「遺産」という枠組みを用いることで見えなくなる／見えてくるものを検討し、文化遺産を捉えるように有効な視点としてあらためて「記憶」「環境」という視点の可能性を考察する。

歴史的な町並みや建造物などの保存をめぐる研究は、これまで環境社会学、都市社会学、文化社会学などで蓄積されてきた。それらの研究蓄積を踏まえて文化遺産の社会学を再考することが本報告の目的である

### ■鞆港保存問題の概要と現状

歴史的な港湾施設を擁する福山市鞆の浦では、埋め立て・架橋計画の是非をめぐり、30年近く地域内で意見対立が続いてきた。この問題は、2009年の広島地裁による計画差し止め判決が出された後に19回の住民協議会を経て、広島県は計画の中止を表明し、一つの区切りを迎えた。しかし、広島県は先の計画では埋立て予定地であったエリアに防潮堤とその管理道路の造成を計画している。この新たな計画に対し、当該エリアに居住する住民（多くは漁師）は強く反対し、鞆港保存問題は形を変えて続いていくことになった。

### ■漁師にとっての焚場

防潮堤と管理道路の造成に対して漁師たち地元住民は、「神様が海から陸に上がることができなくなる」と非常に強く反発している。当該エリアは焚場と呼ばれ、江戸時代には舟の修理などで利用され、造船所が立地していた場所でもある。現在、このエリアには2軒しか造船所が残っていない。しかし、漁師たちの言葉は、彼らにとって焚場は「遺産」ではなく、漁師の生活文化に根ざした空間であり、生きた存在であることを示している。

### ■考察——「遺産」というまなざし

鞆の浦のように「遺産」ではなく現役の空間であるだけでなく、「遺産」として地域社会を支える空間的基盤となっているものも存在することから、文化遺産を考えるときに、「遺産」という概念を自明のものとして無自覚に設定することは注意を要することが分かる。そこで有効と思われるのは、「記憶」「環境」である。

J. デリダは時間の経過のなかで、過去の自分と現在の自分が全く同じでは自己の同一性を確信できない。両者の間に「差延」が存在すること、そして現在の自己の中に過去の自分が存在していたという「痕跡」が必要だと論じた。歴史的環境の保存運動が、町並み景観の喪失は地域アイデンティティの喪失であると訴えていたのは、個人と同じように、地域社会もまた、一定の変化のなかで過去と現在の「差延」、そして現在の都市景観に過去の姿を想起させる「痕跡」としての歴史的環境がなければ、地域の同一性を確認できないからなのかもしれない。

「遺産」をめぐる社会過程には、対象に社会的な意味を見いだしたり、あるいは何らかの意味付与をおこなうことで、その意味を次世代へと引き継がせるものとして選定した根拠とみなそうとする社会的営みが含まれている。保存すべき価値を社会が見いだすとすれば、文化遺産を社会学的に分析する意味はここにあると思われる。